

[論 文]

## J・オースティン『知性と感性』の笑いについて

On the Laughing in J. Austen's *SENSE AND SENSIBILITY*

上 野 正 二

Ueno Shoji

はじめに

J・オースティンの六つの大作の最初に位置づけられている『知性と感性』<sup>(1)</sup>は、知性も感性もバランスよく整ったエレノアとマリアンという妙齢の姉妹の、とりわけ恋愛を中心にした彼女らを取り巻く人々との間で繰り広げられる〈笑いまみれの物語〉である、とすることができるだろう。全体的にそういう色調である。しかも、作家はコメディアをコメディアに仕上げるためにも、本来の文学の仕事を忘れてはいない。卓越した人間の行為を描くという作業である。

しかし、このように言うには、さっそく注釈が必用となるであろう。

まず『知性と感性』は、優れた知性senseと感性sensitivityを備えていることによって対人関係において常に抑制の利いた行動を取ることでできるエレノアに対して、感性豊かであるだけでなく「思慮がない」(6)<sup>(2)</sup>ことも指摘されるために、この作品の最大の厄介事である、ウィロビー問題を引き起こし、この問題を巡って、エレノアにはない成長を遂げるのが、妹のマリアンである。マリアンの感性sensitivityはプラス面とマイナス面を備えているので、これを全体的に否定的に受け取るのではなく、旨く育てて行くならば<sup>(3)</sup>——そういうことは僥倖と呼ばねばならぬほど稀なことなのだが——「尋常ならざる運命」を披くことになるのである。しかし、それがどういうことであるかははじめ、大事なことは、この作品に関して、現代の読者にはいまだにほぼ完全に覆い隠されているように思われる<sup>(4)</sup>。以下に、笑えないし嗤いの問題を巡って考察を展開することによって、これらを明らかにして行きたい。

筆者はこの作品を「笑いまみれの物語」と言う。この作品には『プライドと偏見』以上に、まさに随所に笑いが仕掛けられている。この作品を〈滑稽譚〉であるという、ジョン・ダッシュウッドやサー・ジョン夫妻がそういう取扱を受けていることを否定する者はいないであろうが、ウィロビーやファニーについてはどうであろう。彼らが嗤われているなどと言っても誰も受け入れる者はいないのではないだろうか。しかしそれでは筆者の文学観、オースティンを高級文学だとする筆者の文学観が成り立たないことになるのである。

筆者は『プライドと偏見』を読んでオースティンの愛読者になって以来ずっと、アリストテレスの『詩学』の主張を受け容れて、彼女の作品は優れた人間の行為を描くトラゴイディアと劣悪な人間の行為を描くコーモイディアの両性格を併せ持った、世界的にも極

めて稀な作品なのだ、と書きまた口にしてきた。しかし、もしコーモイディアがただ世間の読者に一読して判る滑稽面をのみ意味するのであるとすると、この『知性と感性』のウィロビーや『プライドと偏見』のウィカムは、彼らこそ劣悪人間の代表と言えるはずであるのに、コーモイディアの対象から除外されてしまうことになるであろう。ウィロビーを嗤う観点を見出さねばならない。また、アリストテレスには見られないのであるが、オースティンの盛り込んでいるマリアンの笑いの観点<sup>(5)</sup>も明らかにしなければならない。

笑いの主人公は、エレノアとマリアンの何れか？嗤いの視点は、明らかに地の文章を除くと、ほとんどがエレノアに依る笑いであると思われる。情熱系のマリアンには、専心熱を入れて振る舞う行為の他は不純であるという考えが含まれており、その限りにおいては、他人を笑う余裕などないのである。だが、マリアンに笑いがあるとすると、どうなるだろうか。

作品解釈上不可欠の視点は、ブランドン大佐を見るそれであると言える。笑いの対象とならない人物は、ウィロビーは後に詳細に検討されなければならないとしても、エレノア、マリアン、エドワードに加えてブランドン大佐の四人のみなのであるが、エドワードはこれまた自分の問題を抱えて四苦八苦しており、他人を批評する余裕はない。残るはブランドン大佐である。大佐はこの作品の主題の何であるかを指し示す重要な発言をしているのである。

ジョン・ダッシュウッドはこの作品の嗤いの半分以上を独り占めしている人物であると思われる。実際、オースティンは彼を嗤い倒す。

サー・ジョン・ミドルトン、ミドルトン夫人、ジェニングズ夫人も軽薄子として、特に前半部分では至る処で笑いの対象になっている。ジェニングズ夫人はひっきりなしにお喋りするのに対して、その娘であるミドルトン夫人は登場人物の中でもとりわけ無口な人物であり、そのことによって語りたくないときの主人公を救うことが笑いの対象になったりする——この場合大事なことは口数の多少ではなく語るべき事を語るべき仕方であること、作家は指し示す(54)。しかしながら、彼らは「人の好き」という一種の徳のお陰で、不道德漢という要素を抜き取られ、物語では最終的には免罪され、主人公に感謝の情さえ抱かせるのである。

ファニー・フェラーズ、ルーシー・スティーラーは嫌味な人物であり軽薄であることによって、嗤いの対象となる資格は充分にあるのだが、どうしてか、読者には笑えないのではないだろうか？ どうしてか？ これはウィロビーにおいて極めつきの問題となるので、置いておこう。

## 一、劣悪者・滑稽人間に対する定式的笑い

さて、ジョン兄が問題である。

彼は先ず、臨終の床で父親から頼まれて妹たちに太っ腹なところを見せることを想像して満足しながらも、性悪でものの見えない妻（ジョンを「思い切って戯画化したような女で、夫に輪をかけて心が狭く利己的だった」(5)、と作家は言う）に唆されて何かと理由付けをして金銭的な援助は一切なくし、ついには義母や妹たちの家移りの手伝いをするこ

とすらしないうで済ませてしまうことになるのであった。

後にロンドンで妹二人に会うことになった彼は、ブランドン大佐の裕福なことを知り、エレノアが彼と結婚することを切望する（それは、自分が妹たちに何の経済的援助をもしてやらなかった罪悪感を免れるためであった）。そしてそれは、彼の頭では『プライドと偏見』の冒頭に見られる資産のある丁年に達した独身男が誰でも妻を欲していることが普遍的真理だとする見解、あるいは同じ作で教育ある妙齢の女性がよく生きる道は結婚にあるという見解<sup>(6)</sup>を地で行くのであるが、自分は指一本貸さない。そして、エレノアらが彼らと同居しているものと思ひ違ひした人が居たことから、じっさい二人を自邸に客分として招いてもいいではないかと思つたがファニーの重ねての抵抗にあい、自分もいろいろと理由を拵えて、妹たちよりもスティール姉妹を招待する。ところがその結果として、ルーシー・スティールがエドワードと婚約していることが露見して、ファニーが恩を施した相手に裏切られた悔しい思いでパニックに陥つたのを次のように言う。「ファニーは体質的に丈夫だし、何ごとにも負けない不屈さがある（実際は自業自得のパニックに陥っている）。聖人のように毅然として（悄然として）耐え抜いて（落ち込んで）いるんだ！もう二度と誰にも目をかけてやらないと言っているよ。ああもひどくだまされたんじゃ、無理もないな！さんざん親切にしてやり、すっかり信用し切つた相手から、あんな恩知らずな仕打ちを受けたんじゃね！家内があの娘たちをうちへ招いたのはまったく慈愛の心から出たことで（亡父との約束を守らぬ良心の呵責からエレノア、マリアンの二人を招こうと言ひだしたジョンに対して、全然その気はなくて彼女らを排除するための当て馬として二人を立てたのだつた。「ファニーは、うまくかわせたのを喜び、それを可能にした機転に得々として——」253）、あの二人が心遣ひしてやるにふさわしく、無害で、行儀のいい娘たちで、好ましい話し相手になるだろうと思つたればこそだつたのに。そうでなきゃ、我々としては、そこにおいで親切なジェニングズ夫人が娘さんの世話をなさっている間、きみとマリアンをぜひ招待したいところだつたんだからね（これも嘘の皮）。それなのにこういう返礼を受けるとは！“あの二人よりあなたの妹さんたちを誘つたほうがどんなにかよかつたか知れやしないわ”ってファニーも例のやさしい口調で（あり得ぬ話である）言つてたよ」（265-6）と言つてのける。

嘘でこね上げたファニーと自分の弁明に対して妹たちの感謝の言葉を要求した上で、さらにエドワードの選択と母親の反対の間に立つたジョンは、エドワードの「人としての義務と愛情を大事にした決断」を母親に対しての「人としての義務も、愛情も、何もかもがないがしろにされてしまった」とすげ替え（266）、また母親が「（エドワードが）生活費を増やす目的で何かの職業につくようなことがあれば、その道での出世を妨げるためだけの手を尽くす」らしいというのに、マリアンが怒りに我を忘れて「あきれたわ！そんなのってあるかしら！」（267）と叫ぶのを取り違へ、「これだけ言われても負けない強情さにおまえがあきれるのはもつともだ、マリアン。叫んでしまうのもごく当然さ」（ibid）、と言つてのけるのだ。

これらは、頭が悪いために取り違へるといふのではなく、ファニーに頭が上がらないところからよろずファニーを先立てるために、いろいろな入れ替えが都合良く行われると言ふべきことである。この後の段落など、〈諧謔のだめ押し〉と言ふことが出来よう。

以上のように、ジョンに関して作家がこれを大笑いしていることは、誰も否定することが出来ないであろう。

ところで、ジョン・ダッシュウッドをこのように笑うならば、このカリカチュア男をさらに強化したカリカチュア (strong caricature of himself) であるその妻、ファニーは——我々はこれを笑わなければならないのだが——どのように可笑しいのだろうか。だが、彼女は more narrow-minded and selfish (5) と記されている。これが笑えるならば、我々はウィロビーだって、否、彼をこそ、その種の人物の代表として論じることができよう。

## 二、ウィロビーの不徳義・劣悪さ

ではウィロビーは、我々はこれをどのように嗤いの対象にすることが出来るのだろうか？ 彼は、エレノア、マリアン、エドワードに次いで第四の重要人物として遇されているかのようにさえしばしば読まれている。彼はもちろん英雄譚の主人公、卓越した人物ではない。では彼は嗤いの対象なのか。我々の目にはそのようには映らないのだが、先に見るところでは、嗤いの対象として描かれているという結論を必然的に導かなければならない。

(A) サー・ジョンには自分が劣悪、軽薄人間であるために、ウィロビーの性格が読めない (9章)。

雨の日に散歩に出て転んで捻挫したマリアンがウィロビーに助けられた初対面の日、彼の名を聞いたジョンは、ウィロビーのことを「またとないくらい良い青年だ、請け合いますよ」(43) と言うものの、それは射撃の腕がよい、乗馬がうまいというだけで、肝心の彼の persuits 職業も talent 能力も genius 天分も語ることは出来ない。——もっとも彼は次いで「それにしてもどういう人なんですか？」と訊ねるエレノアに、彼がアレナム荘園を継ぐことになっていることを語り、彼は結婚相手として捕らえる値打ちがあるとエレノアをけしかける (44)。もちろん、これは一般的にオトナたちのやることでもある。

(B) マリアンやエレノアにとってのウィロビー

それでは、エレノアとマリアンにとって、ウィロビーはどのように目に映っていたのだろうか。彼と出逢って早速意気投合し、「自分がほんとうに愛せる男性には金輪際出会えないだろうっていう予感が強まる一方だわ。わたしは理想が高いんだもの」(18) と言っていたマリアンは、ウィロビーにまさに理想の男性を見た (49) のだったが、その内実はどうであったろうか。

「理想」というのは、人間が成長を遂げるためには——セネカ主義者にも福音主義者にも——導きの旗印として設定しなければならないものだと思われるが、そのような旗印としての理想は、明細書に示されるような中味の詰まったものではありえない。成長に応じて十歩先を導いてくれるものであれば、いわば「空相」でなければならないのである。しかしマリアンの理想はそうではなかった。十六歳の青娘の分際で早くも詳細を詰めたいわば「洞窟のイドラ」であったのだ。そのために自分が思い描いていた「男らしい対応」をウィロビーに見て舞い上がるマリアンが、ウィロビーが事実を隠して去ってしまったために狂乱状態になって、この小説を動かす。その舞い上がりのくだりは、次のように記されている。

「マリアンにしゃべらせようと思ったら、何か趣味嗜好のことを持ち出しさえすればいい。その種の話題が出ると、彼女は黙っていられず、そういうことを話し合う場合ははにかみも遠慮もない。二人はお互いにダンスと音楽を愛好し、その二つに関するあらゆる点でおおむね見方が一致することをたちどころに発見した。マリアンはこれに力を得て、彼の意見をさらにくわしく探ってみる気になり、今度は本のことについてたずねた。彼女が自分の好きな作家たちの名前を出し、夢中になって長々と述べ立てたのだから、二十五歳の青年たる者、たとえそれまではその手の作品を無視していたとしても、よほど鈍感でないかぎり、たちまちその素晴らしさに目覚めてファンに転向して当然だった。二人の好みは著しく似通っていた。それぞれが同じ本、同じ一節に心酔していた。たとえ意見の食い違いが生じ、異論が出たにしても、それは彼女の議論の説得力と澄んだ目の美しさが発揮されるまでのことだった。彼は彼女の判断にすべて同意し、彼女の熱意にすっかり感化された」(47)。

ここでも作家はくすくすと笑っているのではないかと筆者には思われるのだが、マリアンが自分の愛するダンスだの音楽だの、あるいは本についてはさらに細かく自分の好みの作家、作品、フレーズを持ち出し夢中になって長々と喋り立てる。それに対してお調子者のウィロビーが、名前はこれまでも知っていただろうが、とりわけ意味を諒解し感動した訳でもない作品やフレーズを知ったふりをし、すぐにそう思う。「(ウィロビーは) いまや彼女自身の手本によってかき立てられ強められもしている天性の情熱を兼ね備えていたから、彼女の心を惹きつけるにはちょうどよくできていた」(48)。「手本によってかき立てられ強められた天性の情熱」とは、どんな情熱か?と問わねばならない。むろん、そんな矛盾したものはあり得ないことを作家はよく知っている。同様の例は、この作品にだけでも数多く読むことができるのである。

では、エレノアにはウィロビーはどのように見えたのだろうか?彼女は、マリアンについては思慮の欠如により抑制の利かないことを良く見て取っており、「二、三年もすれば妹の考え方も常識と観察という理にかなったものにもとづいて落ち着いてくるでしょう」(56)と言うのだが、すでにその同じ年齢に達しているウィロビーの欠陥については、彼女は気付かなかったのか、笑いもしない。非難などその余地もないかのごとく、しない。否、ウィロビーを非の打ち所のない人物とするのは、マリアンに加えてはダッシュウッド夫人のみが挙げられており(48)、夫人の欠陥についてはエレノアはよく弁えているのであってみれば(6)、ウィロビーについてもそれは感じていたとすべきであろう。マリアンとウィロビーがブランドン大佐のうわさ話をしているところで、二人の見解をたしなめる(50)。ということは、ウィロビーの欠陥(最も重要な点にはまだ気付いていないとしても)には気付きながらも、人間観の世間的相場というもので手を打っている、諦めているということになるだろうか。エレノアの場合、ブランドン大佐との対話(55-6)から<sup>(7)</sup>も、またウィロビー自身の後の弁明を容易に受け容れる所からしても、彼女自身の内にある種の弱さを抱いているということになるだろう。

(C) ウィロビーの本性を知るB大佐は何故語らぬのか?

ではブランドン大佐にはウィロビーはどう映ったと言えようか?上に見たところから、ウィロビーがマリアンと共にブランドン大佐に対して偏見を抱いていたことは判った。大

佐に対してどのような経緯でそのような偏見が生じたのかは、ウィロビーの側から、天気になって欲しいときに雨になると脅かしたとか、カリクルの車体吊りの具合にケチをつけられたのだ、馬を買ってくれぬだのと（52）愚にもつかぬ事を理由にしている。洞察力を誇る読者のうちには、マリアンに恋をしている大佐のことだから、恋敵に良からぬ思いを蓄えていて当然だし、それがウィロビーに直感的に分かったのだろう、などと論じる者もいるかもしれない。しかし、それを言うならば、大佐がマリアンにどうして恋をしたのかを先に問わねばなるまい<sup>(8)</sup>。ジェニングズ夫人の娘たちなど大佐の恋の対象に挙げられる美しい女性は数多いたが、彼の心は動かなかった。彼はエレノアに言うように、マリァンの知的・感性的な卓越性に着眼しているのだ。してみれば、そのような性質の欠落していることが、大佐のウィロビーを見るときに眼に障ったことは、想像に難くないであろう。

この気障りは直ちに現実の問題になる-----といっても、相手はマリアンではなく、大佐の娘とも見られていた娘、イライザであったが。大佐はマリアンと知り合って間もなく、みなで知人の庭園を見物する予定をキャンセルして急遽ロンドンに発った。それは後に判明するところでは、彼の昔の恋人の娘を彼が世話していたところ、彼女が失踪し八ヶ月も消息が途絶えていたのが、彼女の手紙が転送されてきたからであった（209）。この失踪にはウィロビーが関わっており、大佐の言い分では、ウィロビーが「若さと純真さにつけこんでたらしこんだ娘を、まともな住居も援助もなく、孤立無援で、彼の住所さえしらない悲惨きわまる状態に放置した」（ibid.）というのだった。

ただ、ここに一つ問題がある。ブランドン大佐はイライザ事件の決着をつけるために、ウィロビーが大佐より二週間遅れてロンドンにもどったとき、彼と決闘したのだ。ただ、二人とも無傷で終わったのではあったが。つまり、大佐はウィロビーがそれほど卑劣な人間だと知っているのだ。そのウィロビーが自分の愛するマリアンと結婚するらしいという噂がロンドン在住の知り合いの間に流れていた時に、大佐はジェニングズ夫人の屋敷を訪ねてきて、この噂は真実ではないのだがマリアンが手紙を書くほどの間柄であること（ここには少し取り違えがあるのだが）を確認しながら、警告を与えることも、割って入ることもせず、「妹さんには、この上ない幸せがあるように、ウィロビーには、彼女にふさわしい相手となるよう心がけてくれることを祈ります」（174）と言い残して立ち去っている。なぜ大佐は、ウィロビーがマリアンにも卑劣な行動に出る危険性は充分に予想出来るだろうに黙視したのか、というのは、オースティン研究者には理解に余る事柄であるらしいのである<sup>(9)</sup>。しかし、これが理解出来なければ、この同じ書物（22章）でエレノアが、放っておけばルーシー・スティールという女（卑劣とは言わないが、そのままでは相手にロクな結果を招かぬ事が知れている）が自分の愛しいエドワードと婚約しているのを知った時、彼らが結婚に至らないように妨碍する、という義挙に出なかったのは何故であるかについても、理解出来ないであろう。あるいは次作『プライドと偏見』でのダーシーがウィカムの餌食になろうとしている愛するエリザベスへの接近を、彼女のために妨碍するという行動に出なかったことに関しても然りであろう。

私は、この問題は「徳義心の為」であると考え。エレノアのルーシーに対するのも、ブランドン大佐のウィロビーに対するのも同様にである。いずれの場合も本人の最大関心対象者の利益の問題でありながら、そうするならば、同時に自分が「利益」と呼ぶ以上の

利に与る場面である。このように自分が第三者の立場にいない場合には、恋敵の非を明らかにすることは、謂われがあろうとなかろうと、誹謗中傷することになる。エレノアのばあいなど、ルーシー本人が自分の大事な秘密を守りきれずに他言しているのだから、エレノア自身は他に漏らしても痛くもかゆくもないのだから、話しても構わないではないか！しかし、そう思わないのが「徳義心」なのだ。この、たとえば山本周五郎好みの考え方を、日本人がではなく、ジェイン・オースティンがするところが愉快ではないか。それを日本人が判らないと言うから、笑えるではないか。我が国の武士道の発想では、この徳義心を蔑ろにして自分の恋する相手に真相を告げた場合、相手が徳義心に篤い人物である場合には、真相の如何に関わらずその行為自体を不徳義と見なすであろうから、そういう選択をしない方が得だという判断も可能であろう。だが、ブランドンもエレノアもそのような選択原理には依らなかったのである。

#### (D) 露見したウィロビーの本性

ブランドン大佐が急遽ロンドンに発って一週間ほど経ったある日、ダッシュウッド家の者にはマリアンには恋人のように、母親には息子のように、エレノアらには兄のように、細やかな情を見せていた(71-2)ウィロビーが、にわかにロンドンに発つと言って別れを告げに来た。アレナム荘のスミス夫人の命で、一年以内には戻れそうにないと言うものの(76)、一家の者に納得出来る別れの理由ではなかった。エレノアが嘆き悲しむマリアンの為を凶って、ジェニング夫人のロンドンへの招待に応じた際、マリアンはウィロビーに手紙を書くが返事はない。たまたま街で若い女性と連れ立っているのを見かけられた彼は、マリアンを極めてよそよそしい態度で振り切って去る(177)。

翌日、ウィロビーから一通の手紙が届くが(181)、それにはマリアンの出した三通の手紙と髪束が同封され、言う所ではこれまで結婚しようというようなつもりは全くなかったし、これから他の女性と結婚しようとしているというのであった(183)。

マリアンとウィロビーは婚約しているものと信じて掛かっていたエレノアは、この手紙を読んでウィロビーの卑劣さに憤慨し、呆れ果て憎しみを募らせたが(184)、マリアンの口から婚約などしていなかったことを聞く(186)。ただし、マリアンによれば、一方では結婚の約束をしていなかったことから「彼は姉さんが思っているほどいいかげんな人じゃないわ。わたしに対して信義に悖ることをした訳じゃないもの」(ibid.)と言いながら、他方では「わたし自身は、厳密この上ない法律上の契約でお互いに縛られているのと変わらないくらいきちんと彼と契りを交わしている気でいたもの——中略——彼だって同じ気持ちだったのよ——」(188)と覚束ない。

さて、後にウィロビー自身がエレノアに会いに来て語ったところによると、彼は随分いいかげんな男だと言わざるを得ないだろう。

彼はもともと大した財産もないのに金遣いが荒く、金持ちと付き合う癖があり、成年に達する前から年々借金がかさんでいた。スミス夫人が亡くなればその財産を相続して借金から解放されるが、それまでもたないので、財産のある女性と結婚して暮らし向きを立て直そうと考えていた。まさにその時マリアンに逢ったので、「彼女と結ばれるなんて思ってもみないことだった」(320)。それで、「彼女の幸せなど意に介さず、自分が楽しむことだけを考え、我ながらもともと手綱をゆるめ過ぎる癖があった感情にまかせて、わたしは

愛情に応えるつもりもないのに、あらんかぎりの手を尽くして彼女の気に入られようと努めた」(ibid.)のだった。つまり「あなた(エレノア)の怒りと軽蔑の目でどれだけ責められようと文句は言えない卑劣さと身勝手さと冷酷さで、わたしはこうして応えるつもりもなしに妹さんの関心を惹こうとしていた」(ibid.)のだ。それは自分が愛するとはどういうことかを当時分かっていなかったが故に、相手をどんなに傷つけることになるかわかっていなかったからだ。そうして、マリ안의気持ちを犠牲にして「彼女に愛され、彼女といっしょなら恐れずに足りなかったはずの、さほどでもない貧乏を避けるため、わたしは裕福な身にのし上がることで、幸せにつながる一切のものを失ってしまった」(320)<sup>(10)</sup>。

かくいうと、ウィロビーはマリ안의存在意義を認めていたことになろうか。「すると、一時はマリアンに惹かれているという意識があったんですね」と問うエレノアに、彼女の魅力に抗すること、彼女のやさしさに逆らうことはできなかった、知らず知らずのうちに心底好きになっていた。それは自分の生涯で最高の幸せなときだった、だから、彼女に求婚しようとすっかり腹は決まっていた。ただし、懐具合の悪い最中に婚約するのは気が進まず、実行を一日一日のばしていた(321)。ところで、彼は微妙なタイミングについて語る。ついに決心がついて、次にマリアンと二人になる時に、「愛情を彼女に公然と確約」しようと決めてじっさいに会うまでのわずか二、三時間の間に重要な事態の変化が生じた。スミス夫人が自分の別の情事を聞きつけた——イライザ事件を指す——(321)。イライザが判断力を欠いていたとしても、自分がデヴォンシャーで愉快に過ごしていた間に、彼女が極貧の状態に陥っていたことを知らなかったはずはない、と問うエレノアにウィロビーは、「でもほんとに、わたしは知らなかったんです。彼女にわたしの行き先を言い忘れていたとは思いませんでしたし、それに彼女にしたってそれを突きとめる方法ぐらい常識でわかりそうなもんじゃないですか」(322-3)と言う。ここには嘘がある<sup>(11)</sup>。

ところで、スミス夫人だが、夫人はこの情事を聞きつけて、不徳義をとがめ、イライザと結婚するならば許そうと言ってくれたが、そうはゆかず、ウィロビーは夫人から正式に絶縁され家から放逐された。「そうはゆかず」、というのは、マリアンと婚約するためではなく、何と！マリアンに二、三時間後には婚約する腹であったと言うその時既に、「自分が求婚する気になりさえすれば」必ず手に入れられると信じる女性——金持ちの女性——が別にあって(323)、デヴォンシャーを去ったのだ、と言うのだ。

去る前にダッシュウッド家に寄ったのは、スミス夫人に放逐された一件を皆にすぐに気付かれたくないという彼の自尊心からであった(324)。マリアンに書いた最後の手紙はグレイ嬢の作った文章をただひたすら写しただけだ(328)と言う。

### ウィロビーを嗤う視点

このウィロビーの不徳義ぶりを救済するかのような見解が、エレノアには見られる。彼女は、このウィロビーの弁明にすっかり気を許し、彼を哀れむにさえ至っている<sup>(12)</sup>のだが、どうしてそういうことになったのか、プロセスだけでも押さえておこう。

1. 「彼女に愛され、彼女といっしょなら恐れるに足りなかったはずの、さほどでもない貧乏を避けるため、わたしは裕福な身にのし上がることで、幸せにつながる一切のものを失ってしまった」(321)（——この言い分が虚偽であるのは、すぐ前に「愛するとはどう



いうことか当時はわかっていなかったからです。——中略——ほんとうに（マリアンを）愛したんなら、自惚れのために、金銭欲のために、自分の気持ちを犠牲にできるわけはなかったでしょうね。さらに妹さんの気持ちを犠牲にできるわけもない。ところが、わたしはそれをしてしまった」と言っているところからわかる——）というのを聞いたエレノアが勝手にウィロビーがマリアンに惹かれていたことだと解して、「すると一時はマリアンに惹かれるという意識があったんですね」と「いささか気持ちのやわらいだエリナが言った」（ibid.）とされている。

2. ウィロビーは、マリアンの手紙を読んで心を剣で突かれる思いがしたし、「彼女の趣味や考え方——それはわたしには自分自身のものよりよくわかっているつもりですし、自分のなんかよりも大切なのは確かなんです」（325）と言う（——もっとも、この言い分も嘘なのだが——）。これを聞いて、「エリナの心は、いままたなごんだ」（ibid.）とされている。

つまり、エレノアは相手のウィロビーがいかに卑劣な選択をしたか、下劣な人間であるか、とは一切関係なく、ただ彼がマリアンに「惹かれていた」し、またその意味で「マリアンを愛していた」という事実を確認しただけで、自分の気持ちをやわらげているのだ。ここからウィロビーがまともな人間だという見方が出てくることはないのが、確認出来よう。

さて、では、このように描かれるウィロビーを、我々はどのような視点から嗤うことができるのだろうか。

この作品では既にふれたようにジョン・ダッシュウッドが最大のコメディアの主人公だ。その他レディ、ミドルトンやパーマー夫人が嗤えるのだが、それは犬にでも判る性格の欠陥を作家が示しているからだ。というの当然思いつかないといけないことになるだろうが、犬や半端な人間には見当の付かないがある種の人間には可笑しくて仕方ない人格（人格欠陥）というのものもあるのだ。というのは、劣悪・不正な人間というのはそれ自体不幸な人間であり、不幸でいながらそれを鼻の先にぶら下げて歩くというのは、不格好を誇ることであり、それが大笑いの対象になるからなのだ。あるいはまた言い換えれば、不正な人間でもある劣悪な人間というのは、自分の利益にならないことを利益になると独り合点して世間を押し歩いているのであって（『国家』339Aなど）、その点大いに嗤いを買うのだからだ。しかし、この見方も筆者には、今ようやく西洋古典から借りることができるようになったものである<sup>(13)</sup>。

### 不正なる人間が笑われるべきものである理由

プラトンの『ゴルギアス』<sup>(14)</sup>において、途中から対話に割り込んだカリクレスという男がソクラテスに向かって、ソクラテスを除くほとんどの人間が考えている優秀な人間の生き方（＝「自然にかなった正義」488b）として、次のように考えていることを示す。世の中では劣悪な弱い人間たちが自分たち多数の利益を守るために、一人一人は他人に害を与えてでも多くを取り自分は害を被らぬことを望んでいるのだがなるべくは害を受けないことのほうを優先して、欲張るのは醜いことだ不正なことだと言いたて、力ある者が多く取るような支配をすることを防ごうとする。ここに法律による正義が取り決められる。

しかし、自然そのものでは、すぐれた者は劣った者よりも、有能な者は無能な者よりも、多くを持つことこそが正しいのだ、と (483b-e)。

この主張の中には、オースティン小説の大方の登場人物が抱いている幸福観が含まれている。すなわち万人の幸福観は多くを所有し欲するままに振る舞ってなるべく多くの快を感じるのだという見解である。そこにはまた、快とは傷のない甕に蜜が満たされている状態をさすよりは底が抜けていても後から後から流入することの中にあるものだ (494)、という見解がある。

このカリクレスの見解を打ち壊すソクラテスの「鉄と鋼の理論」(509a)は、こうである。

「人は、正しい生き方をするためには、自分自身の欲望を抑制するようなことはしないで、これを最大限にゆるしてやり、そして、勇氣と思慮をもってその最大限にのびたもろもろの欲望にじゅうぶん奉仕し——」(491e-492a) などと言うのは、「秘儀によって浄められぬ人々の」「放埒ひびんさと締めりなさ」を示しており、「穴の開いた甕」(493b)に譬えられる。あるいはまた疥癬かきの幸福論 (494c) に。

これら快樂主義者の主張は、有益な快樂と有害な快樂とを区別しない所から来る。しかし、これを区別するならば、次には身体に関しても魂に関しても、それらを善くする術知と単に阿るだけの術知が区別されることも分かってくる (501a-)。善いものにする術知は「一つの目標」(503d)に目を注ぎ、身体については規律と秩序から生まれる健康を実現し、魂については節制と正義を生み出すのだ。この節制をわきまえた思慮ある人こそ、正しく勇敢でかつ敬虔な人間であり、まったき意味ですぐれた善き人であり、すぐれて善き人ならば何をしてしてもすべてよく立派に行うのであり、それが幸福である。それと反対の状態にある人は悪しき人であり、劣悪でそのなすところがうまうまいかぬ者は惨めな人間である (507c)。ここから、「不正をおこなうのは不正を受けるよりも醜いことであるのと同じ程度だけ、大きな害悪をこうむるのだということ」(508b)が明らかとなり、だから、「自分が不正に横っ面をなぐられたとしても、さらにはほくの身体が切られようと、巾着が切られようと、そんなことはべつに最大の恥辱であるとは、ほくは認めない。いや、むしろ、ほく自身なりほくの持ち物なりを、不正になぐったり切ったりすることのほうが、それよりももっと醜く、もっと大きな災悪であると主張する。同じく、また盗みを働いたり、人をかどわかしたり、壁を破って家へ押し入ったり、要するに、ほくなりほくの持ち物なりに対して、いかなる不正事にせよ、これをおかすことは、被害者のほくにとってよりも、不正をおこなったその当人のほうにとってもっと大きな災悪でもあるし、もっと大きな恥辱でもあると主張する」(508d-e)という結論に至るのである。

我々にとって入り用なのは、ここから、ウィロビーという男は自分の頭の上から災悪が降ってくるように、不幸が押し寄せてくるようにと自ら望んでいるのだ、ということが明らかになっている、ということである。すでにソクラテスも認めざるを得なかったように、彼に同調する者は僅少である。しかしながら、人間の最大の問題では「民衆への恋情」(513)は捨て去らねばならない。大多数は笑えないとしても、鉄と鋼の理論が分かる者は笑わざるを得ない<sup>(15)</sup>のである。

### 三、本物の笑い

作品の最初からブレない二つの価値軸がある。つまり、エレノアとブランドン大佐の見解である。象徴的なのは、主人公マリアンがエレノアの家族として始まり、彼女の側から出て大佐と一緒にいることである。それはつまり、大佐のものである思想に開眼してゆくことを表していると言うことができる。そして、ここに心から心地よく笑える笑いがある。

#### エレノアの考え方

白状すると、筆者は未だにエレノアについては評価が揺れている。というのは幾つかの箇所、言葉の断片をとって考えると、彼女は、我々にオースティンが他の作品において展開するのと同じ重みのある言葉を述べているように思われるのだが、また他の箇所では折角のそういう思想の展開を否定する発言をしているからである。具体的に挙げてみよう。

(エレノアの強さの問題) エレノアは、ルーシーに先手を取られてエドワードと彼女の関係を認めさせられた後、妹にも母にも語る事が出来なくて、耐える。その彼女の強さについて「自制という点では二人は手本にはならず、二人に褒められても励みにはなりそうもなかった。エリナは自分一人のほうが強く、自分の良識にしっかりと支えられていたから、痛恨の念がいかに強烈で生々しいものになろうと、彼女の毅然とした態度はゆるぎなく、快活な様子は変わらなかった」(141)と描かれている。「快活さ」については、じつはI, XVIIで、マリァンの快活さを本物の「生き生きしているmerry」訳ではないと見抜いている節がある(93)。しかし、そういう判断が可能であるのは、真に快活であり得るのは人が真に大事にしなければならぬものをそれとして見て取っており、それが自分に備わっていると安心できる時に他ならないはずだから、である。そしてまた「義人は独りの時もっとも強し」という言葉を、我々は同じ根拠を持った句として我々は理解している<sup>(16)</sup>。

ところが、そのエレノアは、I, XIXではエドワードの去った後の不安な気持ちを静めるのに「絵を描くための机に向かい、終日せせと手を動かし——一家の日常茶飯事にほぼいつもどおり関心を払って」(104)いた。それに対してマリァンは「自制という問題を——いとも簡単に片づけた。つまり愛情が強烈な場合にはそんなのは不可能なことだし、おだやかなものなら自制できて偉くはない、という訳だった」(ibid.)<sup>(17)</sup>と記されている。この「いとも簡単に片づけた」とは作家一流の諧謔であるとせねばならず、マリァンにとっては自制ということは意味のないものだというのである。これは極めて面白い主張である。なぜならば、後に見るように、マリァンになれば「人間にとって一番大事なもの」が心を占拠することが可能になるのだが、エレノアの場合にはただ悲しみを始末する方法としてはそれでよしとしても、これでは如何にしてもそのようなものを心に招き込むことは出来ないのである。エレノアが右のように振る舞うとき、「彼女の心は当然ながら自由だった。ほかのことに考えを縛りつけられずにすんだ。だから、きわめて興味ある対象に関して、過去と未来がいやおうなしに彼女の前に示され、彼女の注意をいやでも惹きつけ、思い出と思案と想像を独占せずにはおかなかった」(105)。しかしながら、これらはいずれも種々の表象像を伴ったものであり、決して一つの大事なことではあり得ないのである。もちろん、マリァンもこの時点ではまだ未完である。彼女の一種の「狂気」はウィロビーに向けられたものに過ぎず「神的狂気」にはほど遠いものではあるが、作家には

こういう問題が念頭にあったと思われる<sup>(18)</sup>。

マリアンとエレノアの見解の違いは、Ⅲ, Iでもくり返される。ここにはエレノアの強さ・朗らかさの秘訣として「自分の義務を果たしているんだって気持ちね——」(262)とあり、それが心の支えになったと言うのである。このように道義心が心の支えになるというのでは、パリサイの矜持に陥っているおそれが大いにある。だが、エレノアをその過ちから救うそれ以上の見解を、我々はこの作品の中に見出すことはできないのである。Ⅲ, IIでは、マリアンと二人で、母親からの贈与金を失ってもルーシーを選ぶエドワードの行動を評して、「彼には親に逆らう気にさせるほどのものがいかにわずかしかなかったか、身内と財産を失ってもなお彼に残る心の慰めといたら、正しいことをしたという自覚以外には、どんなにささやかなものか、二人にしかわからなかった」(270)とある。ここからも、彼女自身はやはり「正しいことをしたという自覚」で慰められる人間であることになろう。対するにマリアンは言う。「そういうのが姉さんの考え方だとしたら、何より大事にしているものwhat is most valuedを失ってもほかのものでそんなにやすやす補えるんだったら、姉さんの堅い決意も、自制心も、そうそう驚くにはあたらないかもしれないわね。わたしにも理解できるものになってくるわ」(263)。

この箇所も重要である。エレノアが、自分には「心の支えになるものがいろいろある I have many things to support me」と言い、また「ひとりの人をずっと愛してゆくという考えには魅惑的なものがあるし、また誰か特定の人間に完全に依存しているひとの幸福に関しても、素晴らしいことが言えるでしょうけど、だからといって、そこから〈そうでなきゃいけない it should be so〉ということは言えないし、そんなことは適切ではないし、そんなことはあり得ないのよ」(ibid.)と、或る「一つの在り方」を否定するのに対して、マリアンは肯定の見解を示しているのだからである。マリアンは、いまはまだ明言してはいないが、〈ソレ〉と言えるものの発見に身を披いているのである。それでどうなるかは、後のマリアンの項で示さなければならないだろう。

#### ブランドン大佐の考え方

I, XIで、ブランドン大佐<sup>(19)</sup>はエレノアと語っていて、次のような発言をしている。

エレノアが、「二、三年もすると妹の考え方も常識と観察という理にかなったものにもとづいて落ち着いてくるでしょう」というのに対して、「----しかし若い人の偏見にはとても愛すべきものがあるので、もっと一般的な考えを受け入れて偏りを失くしてしまうのは残念な気もする」(56)と言い、またその後にも「若い心のロマンティックな高尚さが屈服を余儀なくされる時、この上なく通俗的で有害な考え方にとってかわられる例がいかに多いことか！」(56-7)と述べている。愚劣な人間には共に一種の偏りと思われるものでも、真ん中の偏りというものもある。ロマンティックなものを追い求める者の中にあって失われてはならない「偏り」としての「中」に言及しているのである。それはまた〈極頂〉とも呼ばれる<sup>(20)</sup>。この後の文章の後に、イライザへの言及があり、そのために「通俗的で有害な考え方」というのは自堕落に身を持ち崩す者のことだと思われるかもしれないが、じつは単なる世間の決まり事、儀礼に従っているエレノアとちがって「ロマンチックな高尚さ」に生きるマリアンに言及していることが読み取られなければならない。

II, XIIでは、エレノアの絵をそっちのけにし別人の絵の腕を褒めるフェラーズ夫人に激

昂するマリアンに、大佐はじっと目を注ぐ。「そこに愛すべき点——どんな些細なことにもせよ姉が馬鹿にされるのを黙って見ていられないやさしい心根——しか認めていないようだった」(236)と記されている。これは姉のジェインの身を案じて足元の悪いのも省みず駆けつけたエリザベスを見て、そこに〈美〉を認めるダーシーを想起させる<sup>(21)</sup>。大佐はこの本ではごく僅かな役回りしかしていないと不平をこぼす評者もいる<sup>(22)</sup>が、彼はマリアンの行くべき方向を示せば十分に足りる。マリアンの行方こそ、我々は注視しなければならないのである。

### マリアンの成長

マリアンはたとえば、「マリアンの態度は全体として、理性的な努力というものに目覚めた心の指揮下にあることが感じとれた」(342)と記されているが、この大変化、生長はよく読めば分かるように、すでにIII, Iに記された一種の〈回心〉の結果であるとみななければならない<sup>(23)</sup>。このIII, Xでも、〈悔悛contrition〉〈神への償いatonement to my God〉が触れられており、或る人たちが捉えるように、姉の礼儀、姉の自己抑制に倣うことこそマリアンの成長だと捉えることは、原因と結果の区別ができないおそまつ解釈であることを示しているのである。ではここにいう〈悔悛〉の原理は何であるのか。悔悛がまともなものであるならば、それはいつでも感謝（自分が真に安心してよい状態にいることへの感謝）であると言い切ってよいのだが（cf. マタイ, 3-4章）、まさにそのことがすでに触れた箇所ですぐ後に記されているのである。ただし、その箇所では、誰にも分かるようにはなっていないのでじっくりと読み出さなければならない。

エレノアが、自分と同じく失意のただ中にいたときに、同じく、否もつと辛い目に逢っていたことを縷述べた上で、なおよく抑制し得たことを語った処で、マリアンは初めて聞く話に驚き、自分が如何に姉に残酷なことをしたかを自覚し、「マリアンがいまはこういう心境になっていたから、エリナは妹からどんな約束でもやすやすと取りつけることができた」(264)と記されている。〈こういう心境in such a frame of mind〉とは、先ずは真の悔悛をさすのだが、それはまた〈感謝〉に先立たれている。姉への感謝であった<sup>(24)</sup>。ただしまた、それは自己の存在そのものを相手に捧げても不十分なくらいの感謝だった。「けれど、自分は不当な仕打ちをしたとマリアンは感じていた以上、どんな償いをしてもしすぎるといふことはありえなかった」(265)。ここには『プライドと偏見』でエリザベスが感謝にもとづく恋に陥る<sup>(25)</sup>のとおなじく、「神的な狂気が」出現し始めている。III, Xで「神への償い」に語り及ぶのは、必然的成り行きだと言える。マリアンにおいては、何やら〈悔悛の二段仕込み〉とでも呼びたくなるプロセスが見られるのである。そこでは、また悔悛の結果として「もう計画は立てたから、それをしっかり守れば、感情は自制できるようになるだろうし、短気も直るでしょう。——（中略）——たとえよその人たちと交際するにしても、それはわたしの気持ちが謙虚になり、心を入れかえたこと、そして生活上のより小さな義務としての礼儀作法を穏やかに忍耐強く守れるということを示すためのものでしかないでしょうね」(347)と述べている。それはエレノアを手本exampleとしてエレノアに似たものになる(346)決意が述べられているのである。しかし、そのことからマリアンの向かう方向がエレノアだ、マリアンはロマンティックなものを引っ込めてエレノアの分別に服したのだ、などと受け取ってはならない。マリアンにおいて見る

べきものは、〈最も価値あるものwhat is most valued〉を見ることに基づく悔い改めであり、その悔い改めがふさわしい果実を結んだのである<sup>(26)</sup>。

こうしてみると、すでに触れたエレノアの強さ・朗らかさは、自らに恃むどこか拘りのある引きつった朗らかさであったが、マリアンにおいては真の自由人が誕生しようとしている、とすることができる。最も大いなる力を持つ者が働きかけているのを自覚し、それに応えようとしている限り、ここには障るところのないエネルギーの噴出がある<sup>(27)</sup>。ソクラテスの、あるいは洋の東西を異にするが瘋癲和尚の高らかな笑いが聞こえて来ないであろうか?<sup>(28)</sup>

### むすびに代えて

以上で、我々は『知性と感性』におけるいろいろな笑いを検討してきた。最後に、「マリアン・ダッシュウッドは尋常ではない運命an extraordinary fateに生まれついていた」(378)という文章について、念のために論じておくことにしよう。

作家は幼児性にどっぷり浸かっていたマリアンの成長をひとくさりからかった後に<sup>(29)</sup>、次のように言う。

「しかし、じっさいそうだったのだ。彼女が期待を持って自分自身を好んで喜ばせたような仕方で、抗いがたい情念の犠牲になるのではなく、また、後になって彼女のより穏やかで醒めた判断で決心したように、母親とずっと一緒にいて自分の愉しみをただ世に隠れて勉強することにだけ見出すのではなくて、彼女は19歳で新しい愛を受け入れ、新たな家に定められていた妻、一家の主婦、村の領主夫人としての新たな義務を引き受けたのだった」(393)。

ここにマリアンの存在位置がはっきりと記されている。マリアンは自分が自己免許の情熱系人間だと思い込んでいた時のやり方<sup>(30)</sup>でもなく、またただの分別心で自らを押さえ込んでしまうようなエレノア的なやり方でもなく、新しい方向に向かったのだ、とテキストが明示している。どうしてそんなことになったか、というのは、くり返さないが、このような身の処し方を作家はマリアンに選ばせ、それを“Marianne Dashwood was born to an extraordinary fate”と述べているのだ。「尋常さを越えた」運命という。だって、そうとでも呼ばねば、彼女の新しい居所に関しては、ほとんどの研究屋さんには理解出来ないではないか。

### 註

1. 1795年*SENSE AND SENSIBILITY*の元になる*ERINOR AND MARIANNE*が、1797年*PRIDE AND PREJUDICE*の元になる*FIRST IMPRESSION*が、また1799年に*NORTHANGER ABBEY*の元になる*SUSAN*が脱稿している。最も手を加えることが少なかったと見られる『ノーサンガー・アビー』の無思想性を省みると、*SENSE AND SENSIBILITY*と*PRIDE AND PREJUDICE*はその順に手を加えられ、思想性を深めると見てよいだろう。本稿で筆者は、マリアン・ダッシュウッドがエリザベス・ベネットにつながる前段階であると踏んでいる。
2. 以下、括弧内の数字は、The Oxford Illustrated JANE AUSTEN vol. 1, *SENSE*

AND SENSIBILITYより。なお訳文は、多くの場合キネマ旬報社刊『いつか晴れた日に——分別と多感』の真野明裕氏の訳を使わせていただいた。

3. 成長したマリアンが次作の『プライドと偏見』のエリザベスに引き継がれることになることは、コメンテーターたちも気付かないのだろう。惣谷氏前掲書94頁には、「世間からの孤立、対立という観念のみから考えれば、マリアンはまさにエリザベス・ベネットの原型である」というが、マリアンからそぎ落とされねばエリザベスにはなり得ない、そういう側面があるのだ。マリアンは情熱系だが、この情熱をそぎ落とさないと成長したことにはならないかのごとくに論じている論者もいる。だが、ブライドン大佐のマリアン評に現れる彼女からそぎ落としてはならない側面というのは、まさにそんな論者の否定する側面なのだ。
4. 惣谷美智子氏『ジェイン・オースティン研究』（旺史社1993年刊）には、「喜劇と悲劇の狭間で」と題した論文があり——その悲劇・喜劇の取り扱い、筆者の賛成しない陳腐な見解の踏襲だが——ほぼこれまでに論じ尽くされた『知性と感性』論の論点を要領よく取りまとめた観がある。この作品の題目に表れるsenseにおいてエレノアが、sensitivityにおいてマリアンが特徴づけられ、情熱系のマリアンが失意のために病を得た後に回復するのを、senseが是認されsensitivityが懲らしめを受けるという教訓的図式に刈り込んだ見解には「あまりにも無視できない余剰物が残りすぎる」と氏は言う。マリアン擁護派の氏は、マリアンの「異常な運命」に焦点を当てる。ワットは結末に「ぎこちなく、押しつけがましい操作」を感じ、タナーは「マリアンの再生にむしろ彼女の象徴的な死を見、そこに潜む悲劇的結末を嗅ぎと」り、マドリックは「主人公に対し、強靱かつ複雑、そして永遠の情熱の人間であると手離しの礼讃を惜しまない」で、異常な運命を彼女にあてがった「オースティンの作家としての裏切りを指弾する」と言うのである。また氏は、主人公をエリノアであるとするW・スコット、レジナルド・ファラーは、マリアンの伴侶として最後にあてがわれるブランドン大佐への不満をかかえており、彼らは（マリアンの）主人公としての運命に対して不満をいだいている、と推測する（～92）。

教訓的図式では包みきれぬものが出るのは当然であろうが、氏の指摘するのは次のようなものである。筆者のコメントを付して掲げる。

- ①マリアンの高く評価さるべき純粹性、非日常性は、エレノアの日常性に護られているのに、本人はそれに気付かない-----後にそれに気付くことによって物語が大いに動くのだから、読者はマリアンのものの考え方を発展相において見なければならぬだろう。
- ②ウィロビーへの恋は感性の赴くままに慣習を打ち破るようだが、それも恋愛の約束事の中にはめこまれてゆく-----気の利いた読み込みのつもりだろうが、マリアンについてさえこれでは一面的でしかない。
- ③夾雑物のない恋愛ならば、愛の終わりは絶望でしかなく、マリアンは事実病に倒れる。愛の消滅はほとんど死にも等しいのだ-----これは筋の勝手な読みかえである。
- ④この作品には、上のように、「一種の曖昧性」と呼ばれる夾雑物があり、それが作品世界の核心を構成しているとして、ジェニングズ夫人のワインの話（97～99）や、マ

リアン自身の内部の夾雑物の存在をリアンは身をもって証明した(99-100)がそれは「生き残りのための合理化」(100)だ、などと言う-----だが、そんな話では駄目である。このリアンの自省には「もっと大きな生」への開眼がある。

- ⑤作品の結末に関するオースティンの「相手に理解させるために、まずは誤解させる」手法とそれへの対処法(101-107)-----ここでは、まさに笑いへの感性の違いと評さざるを得ない論点が、作家自身の「裏をかく」(101)やり方で、穿って見、並べ立てられている。イ、テキスト(Oxford版)378頁の評価については、軽い冗談でしかないものを、そこにリアンへの懲罰や悲劇を見る評者への意識過多のために、リアンの二度目の恋を「異常な運命」と捉える氏は、先の「生き残りの合理化」なみの感覚で新しい恋愛をとらえているが、そしてこれは発展相で捉えることができぬためだが、リアンの人柄の成長にともない生じる新しい狂気を理解出来ないでいる。ロ、ウィロビーに関して、穿った見方を示してくれる(103-4)が、作家が嗤う相手は、たとえ「生き長らえる無礼」と表現されていても、死んでいるのである。これは悲劇、喜劇について通俗的見方しかできないことによるであろう。ハ、氏によれば、ブランドン大佐には「唯一無二の価値を持ったものなど何もないという陰鬱さは、同時に代用物があるという気楽さによって中和される」中和剂的な役割が与えられるらしい(105)。しかし、リアンが唯一の価値あるものに触れて回心するという解釈を読者に遂げさせるのが最大の役割と思われるブランドン大佐を、このように持って廻っては、悲劇は成り立ちようがないだろう。もっとも、氏にとっては筆者の示す悲劇など夢にも存在しないのであろうから、やむを得ない。しかし、実にオースティンにおいては、「リアンにあっては、全体的にみれば悲劇であるが、細部は巧緻な喜劇で成り立っており」(cf.106)細部はたのしい夾雑物に過ぎないのである。
5. 二種類のコメディアの問題。まだ気付かれていないdivina comediaの側面がある。オースティンの解説者でも、彼女の作品が諧謔をふんだんに盛り込んだコメディアの側面を持つことは主張するが、そのコメディアに神的なコメディアが加わることに関しては、誰も語らない。
6. 『プライドと偏見』22章でのシャーロット・ルーカスの見解を参照。
7. ここで引用した、リアンが二、三年したら常識と観察によって落ち着いてくるだろうという見解は、ブランドン大佐が反対するように、同時に大事な長所を失わせてしまうことが往々なのである。
8. 恋に理由があるか、と詰問される向きもあるかもしれぬが、少なくとも恋の動機として作家は三種類を区別することができる人であった。あるいは、リアンが大佐の昔の恋人イライザによく似ていたとは書かれている。
9. 宮崎孝一『オースティン文学の妙味』(鳳書房1999年刊,39頁)。ただし、ここでも更に注意深く読まなければならないことがある。大佐はまるで座視していた訳ではない。大佐はほぼ毎日ジェニングズ夫人邸に訊ねてきていたのだが、ある日、リアンとウィロビーの婚約の噂を耳にして、まだ介入の余地があるのかどうかを確かめようとしている。上のように、彼がリアンの手紙を誤解しなければ、自分が、敢えて言うべき事を言い、リアンにプロポーズすることも考えられたのである。



10. この言い分は虚偽である。彼には愛による結びつきが幸福だという考え方はないのである。
11. イライザを自分が一方的に捨てた訳ではないというこの主張は成り立たない。貧窮したら彼女の方から自分を頼って来ればよかったのだ、と言わんばかりであるが、彼はミス夫人の救済策を蹴った際でも、次の本文のようなことをしてのけたのだ。
12. これが作家のウィロビー観の投影だとしたら、我々は彼を嗤えないのだが、後にエレノアも冷静になっている(349)。ということは、ここではエレノアもsensitivityを持った女性であることを示していることになる。
13. 筆者は、先に「『プライドと偏見』の人間観」を論じた際には、ウィロビーの同類であるウィカムを嗤うことは出来なかった。オースティン読解の鍵を、我々はなお多く西洋古典研究から得ることが出来るのではないだろうか。
14. 中央公論社「世界の名著6」『プラトンI』所収、藤沢令夫訳。
15. オースティン自身ほど、これが笑えた人は少ないのだろう。ルーシーがエドワードに見切りをつけてロバートに鞍替えしたのを、次のように嗤ってみせる例も、全く同類であろう。「したがって、この件でのルーシーの身の処し方全体、およびその到達点となったはぶりのよさは、自己の利益に絶えず汲々としていれば、たとえ途中で頓挫するように見えることがあっても、時間と良心を犠牲にするだけで、幸運を余さずつかむのにどれだけ役立つかという、きわめて力強いお手本になるかもしれない」(376,3~9)。
16. マルティン・ルターに関して、そういう言葉が使われる。だが義人がひとりの時に強いのは、神と共にいるからである。
17. この文章と極めてよく似た文章が、同様に重要な意味を担って後に取りあげられねばならぬ事に注意されたい。
18. 「神的狂気」については、プラトン『パイドロス』参照。次作の『プライドと偏見』には明らかにこの神的狂気に関わる話が登場することは、拙稿「J・オースティン『プライドと偏見』の人間観」を参照されたい。
19. ブランドン大佐については、惣谷氏が、前掲書で、悪意を以て評する者たちを紹介しているが、彼は重要人物である。
20. アリストテレス『ニコマコス倫理学』第Ⅱ巻6章参照。
21. 『プライドと偏見』7章参照。
22. 惣谷氏前掲書102頁参照。B大佐を「真空人間」呼ばわりする者がいるというのである。
23. 論者の中には、マリアンは大病の後に理性的になった、と見る者もあるが、そうではない。
24. ‘Marianne was quite subdued. “——Is this my gratitude? Is this the only return I can make you?”’と言うマリアンの直前の言葉は、ここに響いているのだ。
25. 拙稿「J・オースティン『プライドと偏見』の人間観」(本学研究紀要41)参照。
26. 「マタイ福音書」第3章参照。そこには神の支配が万人に及んでいることをソレとして受け取ることにより、悔い改めよ、と読める。
27. 笑いの作家の作品は、隅から隅まで劣悪性を嗤うパロディーだの軽い乗りのユーモア

で満ちている訳ではない。卓越した存在ないしその予感を笑う、このような笑いもあることを銘記せねばなるまい。惣谷美智子、前掲書90頁参照。

28. 西谷啓治『宗教と非宗教の間』（岩波現代文庫）参照。

29. ただ、そこでのブランドンとの結婚が「深い尊敬の念と熱い友情以上の感情は一切抜きで」（392）行われたという記述には、作家特有の隠し球があることを見逃してはならない。つまり、先に触れた感謝に基づく恋が考えられねばならない、という点である。

30. すでに私は彼女の「理想」観について注記した。